

ナタリー・デセイ
&
フィリップ・カサール

Farewell
Concert

Natalie Dessay, Soprano
&
Philippe Cassard, Piano

2025年11月6日(木) 19:00 開演
東京オペラシティ コンサートホール

7:00p.m., Thursday, November 6, 2025 at Tokyo Opera City Concert Hall

主催：ジャパン・アーツ



文化庁

令和7年度 文化庁 劇場・音楽堂等における
子供舞台芸術鑑賞体験支援事業

世界の名だたる歌劇場でオペラ歌手として輝かしいキャリアを築いてきたナタリー・デセイが、信頼を寄せるピアニストのフィリップ・カサールとともに最後のリサイタルを行います。

2013年にオペラの舞台から退き、リサイタルや生涯を通じて情熱を注いできた演劇、ミュージカルに専念することを決意したデセイは、その後も常に独創的で新しい芸術世界を探求し続けてきました。

本公演は、プレヴィン、メノッティ、バーバーなどアメリカの作曲家の作品とラヴェルやプーランクなどのフランス歌曲を織り交ぜ、繊細なニュアンスと鮮やかなコントラストに満ちたプログラム構成でお届けします。これは、息の合ったデュオにとつてのステージとの別れであり、それと同時に世界中で愛され称賛されてきた、忘れがたきコロラトゥーラ・ソプラノ、ナタリー・デセイの60歳の誕生日を記念するコンサートです。

モーツァルト
W.A.Mozart

歌劇《フィガロの結婚》より
Le Nozze di Figaro,

「無くしてしまったわ」バルバリーナのカヴァティーナ
« L'ho perduta me meschina » (Barbarina's cavatina)

「とうとうその瞬間が来た～さあ 早く来て」スザンナのレチタティーヴォとアリア
« Giunse alfin il momento ~ Deh vieni non tardar » (Susanna's recitativo and aria)

「自分で自分がわからない」ケルビーノのアリア
« Non so più cosa son » (Cherubino's aria)

「スザンナは来ない!～いずこそ喜びの日」伯爵夫人のレチタティーヴォとアリア
« E Susanna non vien ~ Dove sono » (Contessa's recitativo and aria)

ショーソン
E.Chausson

「ハチドリ」
Le Colibri

ラヴェル
M.Ravel

「天国の美しい3羽の鳥たち」
Trois beaux oiseaux du paradis

ベッツ
L.Beydts

「傷ついた鳩」
La Colombe poignardée

プーランク
F.Poulenc

「かもめの女王」
Reine des mouettes

ラヴェル
M.Ravel

「悲しき鳥たち」(ピアノ・ソロ)
Oiseaux tristes, for piano

プーランク
F.Poulenc

「モンテカルロの女」
La Dame de Monte Carlo

.....

メノッティ
G.C.Menotti

歌劇《霊媒》より〈モニカのワルツ〉
Le Médium, Monica's Waltz

バーバー
S.Barber

「ノックスヴィル - 1915年の夏」
Knoxville, Summer of 1915

プレヴィン
A.Previn

歌劇《欲望という名の電車》より「私が欲しいのは魔法」ブランチのモノローグ
A Streetcar Named Desire, « I want magic » (Blunche's monologue)

* 当初予定のプログラムから一部変更がございます。

ナタリー・デセイ&フィリップ・カサール 2025年日本公演

11月2日(日)	[横 浜]	神奈川県立音楽堂	主催: 神奈川県立音楽堂
11月6日(木)	[東 京]	東京オペラシティ コンサートホール	主催: ジャパン・アーツ



©Simon Fowler

ナタリー・デセイ (ソプラノ)
Natalie Dessay, Soprano

フランスのリヨン生まれ。ボルドー国立音楽院で学ぶ。通常5年間の課程をわずか1年で修了し、20歳のときに首席で卒業。その後、世界の主要なオペラハウスで活躍してきた。レパートリーは、《魔笛》夜の女王、パミーナ、《ナクソス島のアリアドネ》ツェルビネッタ、《ばらの騎士》ゾフィー、ローラン・ペリー演出《連隊の娘》マリー、《椿姫》ヴィオレッタの他、フランス・オペラの優れた解釈者でもあり、《ハムレット》オフィーリア、《ラクメ》、《ホフマン物語》オランピア、《マノン》でも好評を博している。また、《夢遊病の女》や《ランメルモールのルチア》などのベルカント・オペラにおいても大成功を収めている。

これまでにウィーン国立歌劇場、メトロポリタン歌劇場、ミラノ・スカラ座、バルセロナ・リセウ劇場、ロンドンのロイヤル・オペラハウス、パリ・オペラ座など世界の名だたる歌劇場で定期的に出演し、名声を広めてきた。ウィーン国立歌劇場では、「宮廷歌手」の称号を授与されている。

歌曲の分野でも活躍しており、ミシェル・ルグランとヨーロッパ、南米ツアーで共演、2012年以降はフィリップ・カサールと世界の著名なホールで120公演以上のコンサートを行っている。また、『Entre elle et lui』、『Between yesterday and tomorrow』、『ドビュッシー』、『フランス歌曲集～気まぐれな婚約』、『シューベルト』、『渡り鳥』などのCDもリリースされ、多数の賞を受賞している。

近年は演劇にも活動の場を広げ、ハワード・ベイカーの劇『Und』で高い評価を得た。2018年にはアヴィニョン演劇祭でシュテファン・ツヴァイク作『La Légende d'une vie (ある人生の伝説)』に出演した。

Natalie Dessay appears by arrangement with Les Grandes Voix/Céleste Productions.
Ms Dessay records exclusively for Sony Classical.



フィリップ・カサール(ピアノ)
Philippe Cassard, Piano

パリ音楽院にてドミニク・メルレとジュヌヴィエーヴ・ジョワ＝デュティユーに師事、1982年ピアノ、室内楽で首席をとる。ウィーン音楽大学では、ニキタ・マガロフに師事。1985年クララ・ハスكيل国際ピアノ・コンクールのファイナリスト、1988年ダブリン国際ピアノ・コンクールで第一位を獲得した。

これまでに、ロンドン・フィル、バーミンガム市響、BBCフィル、フランス国立管、フランス放送フィルなど、欧州の主要オーケストラと共演。指揮者では、サー・ネヴィル・マリナー、マレク・ヤノフスキ、サー・ロジャー・ノリントン、シャルル・デュトワ、ウラディーミル・フェドセエフなどと共演してきた。

1993年以降、ドビュッシーのピアノ作品全曲演奏会(1日4公演)をロンドン、パリ、リスボン、ダブリン、シドニー、東京、バンクーバーで開催し、大成功を収めている。この全曲録音は1994年に権威あるディスク大賞を受賞し、2012年に再発売された。

室内楽でも膨大なレパートリーを誇り、クリスタル・ルートヴィヒ、ヴォルフガング・ホルツマイアー、エベヌ弦楽四重奏団などと共演してきた。ナタリー・デセイとは2012年以来、120回以上のコンサートで共演を重ねてきた。

40枚に及ぶディスコグラフィーの中でも、高く評価されているシューベルト作品の他、2021年にリリースされた『ベートーヴェン:ピアノ三重奏曲』でディアパソン・ドール賞、ショック・ドゥ・クラシカ賞、テレマ誌ffffを受賞した。

フランス国営ラジオ番組「フランス・ミュージック」で、2005年以来長年にわたりパーソナリティも務める他、シューベルトとドビュッシーに関するエッセイなども上梓している。

モーツァルト

歌劇《フィガロの結婚》より「無くしてしまったわ」(バルバリーナのカヴァティーナ)

「とうとうその瞬間が来た～さあ 早く来て」(スザンナのレチタティーヴォとアリア)

「自分で自分がわからない」(ケルビーノのアリア)

「スザンナは来ない！～いずこそ喜びの日」(伯爵夫人のレチタティーヴォとアリア)

ヴォルフガング・アマデウス・モーツァルト(1756-91)は、生涯を通じて「歌劇場での成功」を欲していた。中でも、最も知られるのはやはり、ウィーンで1786年に初演のイタリア語の喜劇のオペラ(オペラ・ブッフア)《フィガロの結婚》全4幕であろう。仏人ボーマルシェの原作戯曲の反骨精神が、イタリア人の台本作者ロレンツォ・ダ・ポンテに見事に受け継がれ、「横暴な伯爵に従僕フィガロが立ち向かう」物語がモーツァルトの流麗なる音楽を得た。その結果、本作は、やがて勃発するフランス革命を予見するオペラにもなったのである。

今回、デセイがまず歌うのは、第4幕で少女バルバリーナが歌う短いカヴァティーナ。内容は、使いの証拠に手紙を封したピンを持ち帰るところ、それを落とした彼女が暗がりて懸命に探すというものである。「モーツァルトの最も寂しげなメロディ」と呼ばれ、こまっしゃくれた娘の別の横顔を示す一曲でもある。

次に、第4幕で侍女スザンナが歌うレチタティーヴォ(朗唱)とアリア。伯爵の色好みを懲らしめるべく、夜の庭で伯爵夫人と衣裳を取り換えた彼女は、誤解した婚約者のフィガロが立ち聞きしていると知ったうえで「(本当に私が待つのは)愛するその人。早く来てね」とこの曲を歌う。朗唱部での伴奏のトリルは喜びに震える胸の内を表し、アリアのゆったりした運び(アンダンテ)は心の落ち着きを表現する。

続いては、女声歌手が男装して歌う(ズボン役)ケルビーノの第1幕のアリアを。伯爵夫人に憧れるこの小姓は、高まる思いを赤裸々に吐露。急スピードでの展開ぶりが、少年の猪突猛進ぶりを象徴する。そして、第3幕の伯爵夫人のレチタティーヴォとアリアを。浮気心を隠さない夫をそれでも愛し、「彼の心を取り戻せれば」とひたすら願う一曲である。アリアの構成は2部に分かれ、過去に思いを馳せる前半(アンダンティーノ)と、揺らがぬ愛情が夫に届けばと願う後半(アレグロ)が対照の妙を成している。

ショーソン

「ハチドリ」

パリに生まれ、法律家として活動しつつ、24歳でパリ音楽院に入ったというエルネスト・ショーソン(1855-99)。ワーグナーに心酔し、革新者ドビュッシーとも交流した作曲家である。交通事故のため40代半ばで亡くなったが、オペラ《アルテュス王》や歌曲の数々など、声楽の分野にも多くの傑作を遺している。

この〈ハチドリ〉は、1879年から1880年にかけて作られた歌曲集《7つのメロディ》の第7曲。詩人ル・コント・ド・リールのテキストに拠り、緑のハチドリと赤のハイビスカスの組み合わせを、男女の出会いに譬えたもの。抒情的な調べであり、Pas vite(急がずに)という冒頭の指示と、最後まで貫かれる「四分の五拍子」という独特な歩みが「貴女の口づけで僕も死にたい」といった恍惚の境地を、密やかに告げてゆく。

ラヴェル

「天国の美しい3羽の鳥たち」

生誕150年を迎えたモーリス・ラヴェル(1875-1937)は、スイス人の父とバスク人の母の血を引くフランスの作曲家。幼少期に母親が歌ったバスク民謡のメロディに感化されたという。この「天国の美しい3羽の鳥たち」は、1914年から15年にかけて作曲し、詩も自分で書いた〈無伴奏混声合唱のための3つの歌〉の第2曲。ソプラノのソロが目立つ(一部、テノール・ソロも入る)コーラス曲だが、今回はソプラノ独唱にアレンジして歌われる。

歌詞内の青、白、赤の3羽の鳥はすなわちフランス国を表し、〈Mon ami z-il est à la guerre 私の友人は戦に行っている〉の一節も、平和への想いを述べるものなのだろう。信念を密やかに伝えんとするデセイの歌いぶりにご注目あれ。

ベッツ

「傷ついた鳩」

ボルドー生まれのルイ・ベッツ(1895-1953)は指揮者兼作曲家。伝統的なオペレッタを書いた最後の世代でもある。この〈傷ついた鳩〉は、1950年出版の全4曲の歌曲集《鳥たちのためのシャンソン》の第1曲。象徴派の人ポール・フォールの詩に基づいている。

音楽学者Gyehyun Jungの論によると「鳩は平和の象徴」とまず解釈され、曲調もデクラマシオン(朗唱法)のスタイルであるので、声の技を聴かせるものではなく、伴奏部も常にシンプルな和音で奏される。神に呼びかける形で反戦の思いを伝える一曲なのだろう。

プーランク

「かもめの女王」

1944年出版の歌曲集《変身》全3曲の第1曲。ピアノがアルペジオを奏し続けるなか、急速なるパッセージが途切れなく続く。歌詞は多能の人ルイーズ・ド・ヴィルモランの手になるもの。「(小さな)カモメ」を指すフランス語 mouette には「自由さのシンボル」「高く飛べる鳥の象徴」などの含意があるようだが、客席の皆さまはこの曲をどのように感じられるだろう。

ラヴェル

「悲しき鳥たち」(ピアノ・ソロ)

本曲は、ラヴェルが1905年に作曲した全5曲のピアノ曲集《鏡》の第2曲に当たるもの。静けさ漂う森を表すような左手の落ち着いた運びと、高音域で時折り複雑な動きを示す右手 — 鳥の羽ばたきや囁きにも似た — のコントラストが、聴き手の耳を自然に惹きつける。カサールの冴えた音色づくりにどうぞご注目を。

プーランク

「モンテカルロの女」(詩:ジャン・コクトー)

富豪一族に生まれ、家庭教師に音楽を学んだフランシス・プーランク(1899-1963)は、学閥に属さぬ疎外感を味わいつつも、結果として当時の楽壇を支配した無調主義と距離を置き、メロディアスな名曲を数多く世に送った作曲家である。

本作は一般的に歌曲とみなされるが、楽譜は「ソプラノとオーケストラのためのモノローグ」と銘打ち、「ミニ・オペラもしくはモノ・オペラ(独りで歌い続けるオペラ)」と捉える向きも多い。歌詞は、かのジャン・コクトーが、仏語の上手くない外国人歌手の発音練習用にした「Chanson Parlée 語るシャンソン」だが、その内容 — 人生最後の日をカジノとホテルで過ごす年かさの女性の独白 — に心動かされたプーランクが、湿っぽくなり過ぎない旋律で楽曲化。1961年11月にモンテカルロで世界初演となっている。デセイならではの「率直な表現法」をお楽しみに。

メノッティ

歌劇《霊媒》より〈モニカのワルツ〉

北イタリアに生まれたジャン＝カルロ・メノッティ(1911-2007)は、ミラノ音楽院に学んだのち1928年に米国カーティス音楽院に留学。そこで巡り合ったサミュエル・バーバーと人生を共にすべく1935年以降はアメリカに定住。バーバーとの別離ののちはスコットランドに移住し、生涯で30作近いオペラを作曲。台本も全て自分で執筆した作曲家である。

喜劇タッチの作風が光るメノッティだが、実は悲劇のオペラも多く、中でも全2幕の《霊媒》は深刻なドラマとして異色の輝きを放っている。初演は1946年5月、ニューヨーク市のコロンビア大学内の劇場にて。物語は、自称霊媒師のマダム・フローラが自宅で開く降霊会は、実は彼女の娘モニカが裏で他人の声を真似ているという偽ものの会だが、その最中に突然、マダム・フローラの身体に異変が起き、恐怖に憑りつかれた彼女が、錯乱するというものである。

一方、この〈モニカのワルツ〉は、第2幕の冒頭でモニカが使用人の少年トビー(口がきけない設定)を前に楽し気に歌う一曲。二人は心を寄せ合う間柄であり、トビーの思いまで代弁するかのように、モニカは、空想の世界の楽しみを夢一杯に表現する。

バーバー

「ノックスヴィル - 1915年の夏」

米国ペンシルベニア州生まれのサミュエル・バーバー(1910-81)は、先述の通り、音楽院でメノッティと出会い、長く生活を共にした作曲家である。一般的には1938年初演の「弦楽のためのアダージョ」で知られるが、オペラの代表作《ヴァネッサ》(1957)は、メノッティがバーバーのために台本を書いたという一作でもある。

今回、デセイが取り上げたのはバーバーの声楽曲で特に人気の高い「ノックスヴィル - 1915年の夏」(1948年初演)。本来は声と管弦楽のために書かれた一曲であるので、本日は、カサールのピアノが多彩な音色をどう繰り出すかに注目頂こう。テキストは、文人ジェイムズ・エイジー筆の同名の小編から3分の1ほど抜き出したもの。作曲者は「夕暮れから眠りの時に至るはざまの世界における、子供の孤独感や驚き、自分が他者や社会から認められていないのではと思う気持ちを描く一曲」と述べている。ゆっくり散歩するような曲調のもと、思い出の一日が次々と言葉で蘇るさまを、デセイの繊細な解釈を通じて感じ取って頂ければ幸いである。

プレヴィン

歌劇《欲望という名の電車》より「私が欲しいのは魔法」(ブランチのモノローグ)

指揮者アンドレ・プレヴィン(1929-2019)は、ベルリンでユダヤ系ドイツ人の家庭に生まれ、1938年から米国に移住して活躍した音楽家。作曲家としては、映画音楽などが多いほか、数々のコンチェルトも作っている。

ここで歌われるのは、米国の大劇作家テネシー・ウィリアムズの同名戯曲を原作とする、プレヴィン初のオペラ《欲望という名の電車》(1998、サンフランシスコ)の名場面。第3幕で主人公の女性ブランチが、妹ステラの夫スタンリーに紹介された男性ミッチの前で、自身の現状とスキャンダラスな過去を曝け出したい気持ちを「真実ではなく、魔法を提供したい。電気の灯りのもとはなく…」と詩的に言い換える一場である。耳に馴染みやすい曲調のもと「本当のことはどうしても言えないの」と言外に語り掛けてくるデセイの歌いまわしに耳を^{そめた}敬て頂こう。

Wolfgang Amadeus MOZART :

Le Nozze di Figaro,
« L'ho perduta me meschina »

Barbarina

L'ho perduta... me meschina...
ah, chi sa dove sarà?
Non la trovo... E mia cugina...
e il padron ... cosa dirà?

(Text by Lorenzo da Ponte)

Le Nozze di Figaro,
« Giunse alfin il momento ~ Deh vieni non tardar »

Susanna

Giunse alfin il momento,
che godrò senza affanno
in braccio all'idol mio! Timide cure!
Uscite dal miopetto,
a turbar non venite il mio diletto!
Oh come par che all'amoroso foco
l'amenità del loco, la terra e il ciel risponda,
come la notte i furti miei seconda!

Deh, vieni, non tardar, o gioia bella,
viene ove amore per goder t'appella,
finché non splende in ciel notturna face;
finché l'aria è ancor bruna, e il mondo tace.
Qui mormora il ruscel, qui scherza l'aura,
che col dolce sussurro il cor ristaura,
qui ridono i fioretti e l'erba è fresca,
ai piaceri d'amor qui tutto adescia.
Vieni, ben mio, tra queste piante ascose.
Vieni! vieni! Ti vo' la fronte incoronar di rose!

(Text by Lorenzo da Ponte)

Le Nozze di Figaro,
« Non so più cosa son, cosa faccio »

Cherubino

Non so più cosa son, cosa faccio,
or di foco, ora sono di ghiaccio,
ogni donna cangiar di colore,
ogni donna mi fa palpitar.
Solo ai nomi d'amor, di diletto,
mi si turba, mi s'altera il petto
e a parlare mi sforza d'amore
un desio ch'io non posso spiegar.
Parlo d'amor vegliando,
parlo d'amor sognando,
all'acque, all'ombre, ai monti,
ai fiori, all'erbe, ai fonti,
all'eco, all'aria, ai venti,
che il suon de' vani accenti
portano via con sé.
E se non ho chi mi oda,
parlo d'amor con me.

(Text by Lorenzo da Ponte)

ヴォルフガング・アマデウス・モーツァルト :

歌劇《フィガロの結婚》より
「無くしてしまったわ」

バルバリーナ

無くしてしまった どうしよう!
ああ どこにいったの?
見つからない 無くしてしまった! 困ったわ! 従妹は?
旦那様は なんていうかしら?

(台本:ロレンツォ・ダ・ポンテ 訳:市浦純子)

歌劇《フィガロの結婚》より
「とうとうその瞬間が来た~さあ 早く来て」

スザンナ

とうとうその時がきたわ
憂いなく喜びを味わうの
我が憧れの君の腕の中で! 物怖じなんて
私の胸から出ておいき
私の喜びに水を差さないで!
おお 愛の炎に
快いこの場所 天と地もが応えてくれ
夜も私の密かな企みを後押ししているかのよう!

早くおいで 美しい喜びよ
愛があなたを愉悅へといざなう所へ
まだ夜空に明かりがともらぬうちに
まだ空気はほの暗く 世界が静まり返っているうちに
ここでは小川がさらさら流れ そよ風が戯れ
甘いささやきで心は爽やかに
ここでは花たちが笑い 草はみずみずしく
何もかもが恋の悦びへと誘っているわ
おいで 私の愛する人 この隠れた木立へ
おいで おいで! あなたの顔を薔薇の冠で飾ってあげる!
(台本:ロレンツォ・ダ・ポンテ 訳:市浦純子)

歌劇《フィガロの結婚》より
「自分で自分がわからない」

ケルビーノ

僕にはもうわからない 自分が誰で 何をしているのか
ときには炎となり そしてときには氷となる
どの女性にも頬を染めて
どの女性にも胸がときめく
恋や悦びという言葉は聞くだけで
心は乱れ、胸はざわめき
恋を語らずにはいられない
言葉にできぬ心の疼きのために
目覚めては恋を語り
夢見ては恋を語る
水に 影に 山々に
花に 草に 泉に
こだまに 空気に 風に向かい
空しく舞う言葉の調べを
風がさらってゆく
もし聞く者がいなければ
僕はただ独り恋を語り続ける
(台本:ロレンツォ・ダ・ポンテ 訳:市浦純子)

Le Nozze di Figaro,
« E Susanna non vien ~ Dove sono »

Contessa

E Susanna non vien! Son ansiosa
di saper come il Conte
accolse la proposta. Alquanto ardito
il progetto mi par; e ad uno sposo
si vivace e geloso...
Ma che mal c'è?
Cangiando i miei vestiti
con quelli di Susanna, e i suoi co' miei...
Al favor della notte... O cielo! A quale
umil stato fatale io son ridotta
da un consorte crudel; che, dopo avermi,
con un misto inaudito
d'infedeltà, di gelosie, di sdegni,
prima amata, indi offesa, e alfin tradita,
fammi or cercar da una mia serva aita!

Dove sono i bei momenti
di dolcezza e di piacer,
dove andaro i giuramenti
di quel labbro menzogner?
Perché mai se in pianti e in pene
per me tutto si cangiò,
la memoria di quel bene
dal mio sen non trapassò?
Ah! Se almen la mia costanza
nel languire amando ognor,
mi portasse una speranza
di cangiar l'ingrato cor.

(Text by Lorenzo da Ponte)

Ernest CHAUSSON :
« Le Colibri »

Le vert colibri, le roi des collines,
Voyant la rosée et le soleil clair
Luire dans son nid tissé d'herbe fines,
Comme un frais rayon s'échappe dans l'air.

Il se hâte et vole au source voisines,
Où les bambous font le bruit de la mer;
Où l'açoka rouge, aux odeurs divines,
S'ouvre, et porte au cœur un humide éclair.

Vers la fleur dorée il descend, se pose,
Et boit tant d'amour dans la coupe rose,
Qu'il meurt, ne sachant s'il l'a pu tarir.

Sur ta lèvre pure, ô ma bien-aimée,
Telle aussi mon âme eut voulu mourir
Du premier baiser qui l'a parfumée!

(Text by Charles-Marie-René Leconte de Lisle)

歌劇《フィガロの結婚》より
「スザンナは来ない! ~ いずこそ喜びの日」

伯爵夫人

スザンナがまだ来ない! 気が気じゃないわ
伯爵はあの提案を
どう受け止めたのかしら 確かに大胆すぎる
計画だわ あれほど激しやすく
嫉妬深い夫を相手に...
でも 何が悪いのよ?
私の服をスザンナのものを取り替え
彼女には私のものを着せて...
夜の闇を味方に... ああ 神様! 何という
惨めな境遇に私は落ちぶれてしまったの
無情な夫のせいで あの人は私を
あり得ないような
不実と嫉妬と侮蔑がないまぜになった仕打ちで...
はじめは(私を)愛し やがて傷つけ ついには裏切った
今や私は 自分の召使いに助けを求めねばならないなんて!

美しい思い出よ どこへ
楽しかった時間は
あの嘘つきな唇の
誓いはどこへ消えたの?
どうして すべてが涙と痛みに
変わってしまったときに
あの幸せの記憶も
胸から消え去ってくれなかったの?
ああ! せめて私の変わらぬ真心が
打ちひしがれながらも愛し続ければ
希望は消えないわ
あの不義理の心も変わるはず

(台本:ロレンツォ・ダ・ポンテ 訳:市浦純子)

エルネスト・ショーソン :
「ハチドリ」

緑のハチドリ 丘地の王よ
その見つめる先には 朝露と明るい太陽が
細い草を編んだ巣の中で輝いている
まるでさわやかな光が空に漏れ出したように

あわただしく飛びまわり 泉を巡る
そこは波音響く竹林
馥郁と香る無憂樹が
赤い花を咲かせ 濡れた閃光を胸にいだく

黄金色の花へと舞い下り
薔薇色の盃から愛の蜜を貪る
いっそ蜜が涸れることも気にせず命尽きよ

その清純な唇に触れたとたん ああ 愛しいハチドリよ
我が魂もまた命尽きよと願った
魂を芳香で満たした最初の口づけとともに

(詩:シャルル＝マリ＝ルネ・ルコント・ド・リール 訳:藤本優子)

Maurice RAVEL :
« Trois beaux oiseaux du paradis »

Trois beaux oiseaux du Paradis,
(Mon ami z-il est à la guerre),
Trois beaux oiseaux du Paradis
Ont passé par ici.
Le premier était plus bleu que le ciel,
(Mon ami z-il est à la guerre),
Le second était couleur de neige,
Le troisième rouge vermeil.

“Beaux oiselets du Paradis,
(Mon ami z-il est à la guerre),
Beaux oiselets du Paradis,
Qu’apportez par ici?”

“J’apporte un regard couleur d’azur,
(Ton ami z-il est à la guerre)”
“Et moi, sur beau front couleur de neige,
Un baiser dois mettre, encore plus pur.”

“Oiseau vermeil du Paradis,
(Mon ami z-il est à la guerre),
Oiseau vermeil du Paradis,
Que portez-vous ainsi?”

“Un joli cœur tout cramoisi,
(Ton ami z-il est à la guerre).”
“Ha! je sens mon cœur qui froidit . . .
Emportez-le aussi.”

(Text by Maurice Ravel)

Louis BEYDTS :
« La Colombe poignardée »

Si Dieu n’avait pas fait le soleil et les mondes,
Il n’y aurait pas eu les douleurs, ni ma blonde.
Pas de coups, de sang rouge et ni ma bien-aimée . . .
Il n’y aurait sur terre colombe poignardée.

Si Dieu n’avait pas fait la lune et les orages,
Il n’y aurait pas eu de pleurs aux doux visages,
Ni de couteau farouche et ni ma bien-aimée . . .
Il n’y aurait sur terre colombe poignardée. . .

Si Dieu n’avait pas fait les jours après le jour,
Il n’y aurait pas eu d’amour, ni mon amour !
Il n’y aurait sur terre colombe poignardée.
Et ni, Seigneur ! ma bien-aimée.

(Text by Paul Fort)

モーリス・ラヴェル :
歌曲「天国の美しい3羽の鳥たち」

天国の美しい三羽の鳥たちが
(私の友は戦場にいる)
天国の美しい三羽の鳥たちが
この場所に寄った
一番目の鳥は空よりも美しく
(私の友は戦場にいる)
二番目の鳥は雪のように白く
三番目の鳥は赤く鮮やかだった

「天国の美しい小鳥たちよ
(私の友は戦場にいる)
天国の美しい小鳥たちよ
ここから何を持っていくのか?」

「私は群青のまなざしを持っていこう
(君の友は戦場にいる)」
「ならば私は、雪のように白く美し額に
口づけをよりいっそう無垢に際立たせよう」

「天国の赤く鮮やかな鳥よ
(私の友は戦場にいる)」
天国の赤く鮮やかな鳥よ
そこに何を抱えているのか?」

「真っ赤に染まるきれいな心を
(君の友は戦場にいる)」
「ああ、私の心臓が冷たくなっていく…
この心臓も持ち去ってくれ」

(詩:モーリス・ラヴェル 訳:藤本優子)

ルイ・ベッツ :
「傷ついた鳩」

もし神が太陽と数々の世界を生み出していなければ
苦しみもなければ ブロンドの彼女もいなかっただろう
災難もなければ 赤い血もなく 我が愛する人もいない…
地に落ちた傷ついた鳩もいなかっただろう

もし神が月と嵐を生み出していなければ
優しい顔立ちに涙が流れることもなかっただろう
惨たらしいナイフもなければ、我が愛する人もいない…
地に落ちた傷ついた鳩もいない…

もし神が次々と一日を生み出していなければ
愛もなければ 愛する人もいなかったはずだ!
地に落ちた傷ついた鳩もいなかっただろう
それに ああ 神よ! 我が愛する人もいなかっただろう

(詩:ポール・フォール 訳:藤本優子)

Francis POULENC :
« Reine des mouettes »

Reine des mouettes, mon orpheline
Je t'ai vue rose, je m'en souviens
Sous les brumes mousselines
De ton deuil ancien.

Rose d'aimer le baiser qui chagrine
Tu te laissais accorder à mes mains
Sous les brumes mousselines
Voiles de nos liens.

Rougis, rougis mon baiser te devine
Mouette prise aux nœuds des grands chemins.

Reine des mouettes, mon orpheline
Tu étais rose,
accordée à mes mains
Rose sous les mousselines
Et je m'en souviens.

(Text by Louise de Vilmorin)

Francis POULENC :
La Dame de Monte Carlo

Quand on est morte entre les mortes,
Qu'on se traîne chez les vivants,
Lorsque tout vous flanque à la porte
Et la ferme d'un coup de vent,
Ne plus être jeune et aimée...
Derrière une porte fermée,
Il reste de se fiche à l'eau
Ou d'acheter un rigolo.
Oui Messieurs, voilà ce qui reste
Pour les lâches et les salauds.
Mais si la frousse de ce geste
S'attache à vous comme un grelot,
Si l'on craint de s'ouvrir les veines,
On peut toujours risquer la veine
D'un voyage à Monte-Carlo.
Monte-Carlo, Monte-Carlo.
J'ai fini ma journée.
Je veux dormir au fond de l'eau.
De la Méditerranée.
Après avoir vendu votre âme
Et mis en gage des bijoux
Que jamais plus on ne réclame,
La roulette est un beau joujou.
C'est joli de dire : « je joue ».
Cela vous met le feu aux joues
Et cela vous allume l'œil.
Sous les jolis voiles de deuil
On porte un joli nom de veuve.
Un titre donne de l'orgueil !
Et folle, et prête, et toute neuve,
On prend sa carte au casino.
Voyez mes plumes et mes voiles,
Contemplez le strass de l'étoile
Qui me mène à Monte-Carlo.
La chance est femme.

フランシス・プーランク :
「かもめの女王」

かもめの女王よ みなしごよ
君が薔薇色に染まるのを目にしたことがある
その身を覆う泡のような霧は
かつての君の嘆き

悲しみの口づけを愛して薔薇色に染まり
君は私の手に包まれた
その身を覆う泡のような霧は
二人の絆を隠すヴェール

赤く 赤く染まれ 私の口づけが君の心を見抜く
街道の分かれ目に囚われたかもめよ

かもめの女王よ みなしごよ
君は薔薇色に染まり
私の手に包まれていた
泡のような霧に覆われ薔薇色に染まっていた
その姿を私は覚えている

(詩:ルイーズ・ド・ヴィルモラン 訳:藤本優子)

フランシス・プーランク :
「モンテカルロの女」

死者の中の死者となり
生者の中を苦しげに歩む女
誰からも追いやられ
きつく扉を閉ざされたなら
もはや若くもなければ 愛されることもない...
閉ざされた扉の裏で
できることといえば海に身を投げるか
ピストルを買うことくらい
ええ みなさん できるのはそれだけ
臆病で卑劣な者たちにできるのはね
でも そんな振る舞いの恐ろしさが
猫の首の鈴のようにつきまとうのなら
自分の手首の血管を切るのが恐いのなら
いつだって自分の運を天に任せればいい
モンテカルロへの旅で
モンテカルロ モンテカルロ
今日の仕事は終わった
海の底で眠りたい
地中海の底で
あなたの魂を売り払い
身を飾る品々を質に入れ
どうせもう誰にも求められることもない品々
そのあとはルーレットがお気に入りのおもちゃ
「賭ける」というすてきな言葉
それだけで頬が火に染まり
片目に明かりが灯る
すてきな喪服のペールの下に
寡婦というすてきな名前
肩書が誇りをくれる!
頭がおかしくて 覚悟もできて 何も知らない女が
カジノでカードを引く
この羽根飾りとペールがあるでしょう
まがいもののお星さまをご覧なさい
これが私をモンテカルロへ導いた
幸運は女

Elle est jalouse
 De ces veuvages solennels.
 Sans doute elle m'a cru l'épouse
 D'un véritable colonel.
 J'ai gagné, gagné sur le douze.
 Et puis les robes se décousent,
 La fourrure perd ses cheveux.
 On a beau répéter : « je veux »,
 Dès que la chance vous déteste,
 Dès que votre cœur est nerveux,
 Vous ne pouvez plus faire un geste,
 Pousser un sou sur le tableau
 Sans que la chance qui s'écarte
 Change les chiffres et les cartes
 Des tables de Monte-Carlo.
 Les voyous, les buses, les gales !
 Ils m'ont mise dehors... dehors...
 Et ils m'accusent d'être sale,
 De porter malheur dans leurs salles,
 Dans leurs sales salles en stuc.
 Moi qui aurais donné mon truc
 A l'œil, au prince, à la princesse,
 Au Duc de Westminster, au Duc,
 Parfaitement.
 Faut que ça cesse,
 Qu'ils me crient, votre boulot !
 Votre boulot !...
 Ma découverte.
 J'en priverai les tables vertes.
 C'est bien fait pour Monte-Carlo.
 Monte-Carlo.
 Et maintenant, moi qui vous parle,
 Je n'avouerai pas les kilos
 Que j'ai perdus à Monte-Carle,
 Monte-Carle ou Monte-Carlo.
 Je suis une ombre de moi-même...
 Les martingales, les systèmes
 Et les croupiers qui ont le droit
 De taper de loin sur vos doigts
 Quand on peut faucher une mise.
 Et la pension ou l'on doit
 Et toujours la même chemise
 Que l'angoisse trempe dans l'eau.
 Ils peuvent courir.
 Pas si bête.
 Cette nuit je pique une tête
 Dans la mer de Monte-Carlo.
 Monte-Carlo.

(Text by Jean Cocteau)

Gian-Carlo MENOTTI:
Le Médium, « Monica's Waltz »

Monica

Bravo! And after the theatre, supper and dance
 Music! Ooom pah pah, oom pah pah...

Up in the sky, someone is playing
 a trombone and a guitar
 Red is your tie, and in your velveteen coat,
 you hide a star

幸運は妬む
 まじめぶった寡婦ぐらしを
 だから 私を人妻だと思いこんだはず
 立派な大佐さまの妻だと
 私はそう 十二に賭けて勝った
 それから どのドレスも裂け
 毛皮の毛がみんな抜けた
 意味もなく繰り返す「もっと」と
 幸運に嫌われたらもう
 心が昂ぶったらもう
 指一本動かせず
 ボードにコインを押し出すこともできなくなる
 そう 幸運が去り
 数字やカードを変えてくれなくなるまで
 それがモンテカルロのテーブル
 ごろつき まぬけ 悪たれども！
 私はやつらにけんもほろろに…叩き出され…
 汚らしいと罵られ
 フロアの疫病神と罵られた
 やつらの白壁の汚いフロアで罵られた
 私はあれをあげるつもりだったのに
 目玉に 王子さまに お姫さまに
 ウェストミンスター公爵に 公爵に
 それも完璧に
 もう終わりにしよう
 私をどなりつけばいい さあ 仕事だ と
 仕事だ！と…
 私の発見のこと
 緑のテーブルからあれを奪ってやろう
 モンテカルロには当然の報いだ
 モンテカルロ
 そして今 あなたに話しかける
 重さのことは告げない
 モンテカルロで失った重さのことは
 モンテカルルだかモンテカルロだか
 私は私自身の影…
 どんな倍賭けもどんな手口も
 チップの集配係も当然のように
 遠くから人の手を叩く
 チップを刈り取れるようになったから
 それに年金か借金か
 それにいつも同じシャツ
 それも不安でびしょ濡れになったシャツ
 みんな走れはする
 それほどばかじゃない
 今夜 私は飛びこむ
 モンテカルロの海に
 モンテカルロ

(詩:ジャン・コクトー 訳:藤本優子)

ジャン＝カルロ・メノッティ :
歌劇《霊媒》より〈モニカのワルツ〉

モニカ

ブラヴォー！芝居を観た後は タゴ飯とダンス
 そして音楽！ウン・パ・パ ウン・パ・パ

空に向かって
 誰かがトロンボーンとギターを奏でているわ
 あなたのネクタイは赤色
 そしてあなたのヴェルヴェットのコートの中に あなたは星を隠している

Monica, Monica, dance the waltz
Monica, Monica, dance the waltz
Follow me, moon and sun
Keep time with me, one two three one

If you're not shy, pin up my hair
with your star and buckle my shoe
And when you fly, please hold on tight to my waist
I'm flying with you, oh...
Monica, Monica, dance the waltz
Monica, Monica, dance the waltz
Follow me, moon and sun
Follow me, follow follow me
Follow me, follow follow me

What is the matter, Toby?
What is it you want to tell me?
Kneel down before me
And now tell me

Monica, Monica, can't you see
That my heart is bleeding, bleeding for you?
I loved you Monica all my life
With all my breath, with all my blood
You haunt the mirror of my sleep, you are my night
You are my light and the jailer of my day
How dare you, scoundrel,
talk to me like that!
Don't you know who I am?
I'm the queen of croundel!
I shall have you put in chains!

You are my princess, you are my queen
And I'm only Toby, one of your slaves
And still I love you and always loved you
With all my breath, with all my blood!
I love your laughter, I love your hair
I love your deep and nocturnal eyes
I love your soft hands, so white and winged
I love the slender branch of your throat
Toby! Don't speak to me like that...
You make my head swim

Monica, Monica, fold me in your satin gown
Monica, Monica, give me your mouth
Monica, Monica, fall in my arms!

Why, Toby. You're not crying, are you?
Toby, I want you to know that you have
The most beautiful voice in the world
(Text by Gian-Carlo Menotti)

Samuel BARBER :
Knoxville, « Summer of 1915 »

It has become the time of evening
when people sit on their porches,
rocking gently and talking gently
and watching the street
and the standing up
into their sphere of possession of the trees,

モニカ モニカ ワルツを踊って
モニカ モニカ ワルツを踊って
私についてきなさいよ 月も太陽も
リズムを私に合わせて 1 2 3 1

恥ずかしがらずに
あなたの星で私の髪を留めて 私の靴を留めてね
あなたが飛行するときは 私の腰をしっかりと抱いていてちょうだい
私はあなたと一緒に飛ぶんだから
おお モニカ モニカ ワルツを踊って
モニカ モニカ ワルツを踊って
私についてきなさいよ 月も太陽も
私と一緒に
私と一緒に・・・etc.

どうしたの トビー?
私に何が言いたいのか
私の前に跪いて
それから話してちょうだい

「モニカ モニカ 分からないのか?
僕の心が君のために血を流し 血を流しているということを
愛しているんだ モニカ ずっと前から
我が息のすべて 我が血のすべてで
君は僕の眠りに付きまとう君は僕の夜となり
君は僕の光となり そして昼間の見張り番になるのだ」
なんて図々しいんでしょう ならず者さん!
そんな風によくも言えたものね!
私を誰だと思っているの?
私はアラウンデルの女王ですよ
あなたを鎖で繋いでしまおう

「君は僕の王女 君は僕の女王
そして僕はしがないトビーだよ 君の奴隷さ
でも君のことを愛しているし これからもずっと愛す
息のすべてで 血のすべてで
僕は君を愛しているんだ 君の笑い声も 君の髪も
愛しているんだ 君の深くて夜のような瞳を
愛しているんだ 君の柔らかな手を、真っ白な翼のような手を
愛しているんだ 君のほっそりした首筋を」
トビー そんなことを言わないで!
頭がくらくらしてしまうわ

モニカ モニカ 君のサテンのガウンで僕を包んでおくれ
モニカ モニカ 君の唇が欲しい
モニカ モニカ 僕の腕に抱かせてくれ

なぜ?トビー!泣いているのね?
トビー 教えてあげたいわ
あなたは世界一美しい声を持っているってね
(ジャン＝カルロ・メノッティ 訳:岸 純信)

サミュエル・バーバー :
「ノックスヴィル - 1915年の夏」

夕暮れ時になると
人々はベランダに座り
互いを優しく揺さぶりながら静かに語り合い
通りを眺め 鳥たちが隠れ家として
ー 飛行機なら格納庫の如く
ー ぶら下がる木々が自分たちの世界のものとして

of birds' hung havens, hangers.

People go by; things go by.
A horse, drawing a buggy,
breaking his hollow iron music on the asphalt;
a loud auto; a quiet auto;
people in pairs, not in a hurry,
scuffling, switching their weight
of aestival body, talking casually,
the taste hovering over them of vanilla,
strawberry, pasteboard and starched milk,
the image upon them of lovers and horsemen,
squared with clowns in hueless amber.

A streetcar raising its iron moan:
stopping, belling and starting; stertorous;
rousing and raising again its iron increasing moan
and swimming its gold windows
and straw seats on past and past and past,
the bleak spark crackling and cursing above it
like a small malignant spirit set to dog its tracks;
the iron whine rises on rising speed;
still risen, faints; halts; the faint stinging bell;
rises again, still fainter, fainter, lifting,
lifts, faints forgone: forgotten.
Now is the night one blue dew.
Now is the night one blue dew,

my father has drained,
now he has coiled the hose.
Low on the length of lawns,
a frailing of fire who breathes ...

Parents on porches: rock and rock.
From damp strings morning glories hang
their ancient faces.
The dry and exalted noise of the locusts
from all the air at once enchants my eardrums.
On the rough wet grass of the backyard
my father and mother have spread quilts.
We all lie there, my mother, my father,
my uncle, my aunt, and I too am lying there ...
They are not talking much, and the talk is quiet,
of nothing in particular, of nothing at all
in particular, of nothing at all.
The stars are wide and alive,
they seem each like a smile of great sweetness,
and they seem very near.

All my people are larger bodies than mine, ...
with voices gentle and meaningless
like the voice of sleeping birds.
One is an artist, he is living at home.
One is a musician, she is living at home.
One is my mother who is good to me.
One is my father who is good to me.
By some chance, here they are, all on this earth;
and who shall ever tell the sorrow of being
on this earth, lying, on quilts, on the grass,
in a summer evening, among the sounds of the night.
May God bless my people, my uncle, my aunt,

立ち上がってゆくのをしていた

人々が通り過ぎ 物事が過ぎ去る
馬車を引く馬が
アスファルトの上でうつろな蹄鉄の音楽を響かせる
騒々しい車 静かな車
ペアになった人々が 急ぐ様子もなく
足を引きずって歩き 夏の体の重みを切り換えながら
何気ない会話を交わし
偽のバニラ味やイチゴ味のプディングの香りを
周囲に漂わせ
彼らの頭の中で恋人たちや騎手たちの姿をイメージし
それが褪せた琥珀色の田舎者たちとも調和する

路面電車がレールを軋ませ
止まり ベルを鳴らし そして発進する
甲高い音を立て 鉄の軋みを増しながら
金色の車窓と藁の座席を
過去から過去へと泳ぎ回りながら
暗い火花が その上でパチパチと音を立てて呪い
まるで追跡を続ける小さな悪霊のように
その上で走り続ける
鉄の軋みは速度を上げてさらに高まる
さらに高くなり かすかに消え 上昇し
かすかに消え 忘れ去られる
今 夜は青い露に包まれている
今 夜は青い露に包まれている

父さんは水を抜き
ホースを巻き上げた
芝生の端で
幽かに炎が息づいている

ベランダに座っている両親 岩と岩
湿った蔓から朝顔が出る
萎んだ花びらを垂らしている
空一面に響きわたるセミの乾いた喜びに満ちた鳴き声が
たちまち僕の鼓膜を魅了する
裏庭のざらざらとして湿った芝生の上に
父と母はキルトの掛布団を広げている
僕たちは皆そこに横たわっている 母 父 叔父 叔母
そして僕もそこに横たわっている
みな 多くは話さず 口調は静かで
話題は特段何でもないこと 全くもって何でもないこと
特段何でもないことだ
星々は空に広がり活き活きと輝き
それぞれがとても優しい微笑みのよう
みな とても近くにあるように思える

僕の家族は皆 僕よりも体が大きくて
静かで 眠っている鳥の声のように優しく
でも取るに足らない声をしている
その一人は芸術家 彼は家に住んでいる
一人は音楽家 彼女は家に住んでいる
一人は僕に優しくしてくれる母で
一人は僕に優しくしてくれる父
どういうわけか 彼らは皆 この地上にいる
夏の夕暮れ 夜の音に包まれながら
キルトの上に 草の上に横たわっている
この地上の悲しみを 誰が語り継ぐことができるだろう
神が僕の家族 僕の叔父 叔母 僕の母 僕の優しい父を

my mother, my good father,
oh, remember them kindly in their time of trouble;
and in the hour of their taking away.

After a little I am taken in and put to bed.
Sleep, soft smiling, draws me unto her:
and those receive me, who quietly treat me,
as one familiar and well-beloved in that home:
but will not, no, will not, not now, not ever;
but will not ever tell me who I am.

(Text by James Agee)

André PREVIN :
A Streetcar Named Desire,
« I want magic »

Blunche

Real! Who wants real?
I know I don't want it. I want magic!
Magic! Yes! That's what I want!
That's what I try to give to people.
I do misrepresent things.
I don't tell the truth.
But I tell what ought to be the truth.
What it ought to be.

Yes, magic. Magic's what I try to give to people.
If that's a sin,
If that is such a sin, then let me be... damned for it!
Don't turn on that light!

It'll all look so ugly in that light.
Why not see by candlelight... or moonlight,
or by starlight?
They are bright enough to see by.
Sometimes too bright.

(Text by Philip Littell)

祝福してくれますように
彼らが苦難の時に優しく思い出して下さいますように
彼らが連れ去られる時にも思い出して下さいますように

しばらくして 僕は家に迎え入れられ ベッドに寝かされた
柔らかな微笑みを浮かべた眠りが僕をそこに引き寄せる
そして 僕を温かく迎えてくれる人々は
まるでその家の親しい人 愛されている人のように 静かに
接してくれる でも 彼らは決して 今も そしてこれからも
僕が誰なのかを決して教えてくれないのだろう

(詩:ジェームズ・エイジー 訳:岸 純信)

アンドレ・ブレヴィン :
歌劇《欲望という名の電車》より
「私が欲しいのは魔法」

ブランチ

真実? それを誰が欲しいがるの?
私は要とは思わないの 私が欲しいのは魔法よ!
魔法! そう! それが私が欲しいもの
私が皆さんに差し上げたいのも魔法なの
私は確かにものを誤魔化してしまう
真実は言わない
でも 真実であるべきことは言うのよ
真実であるべきことをね

そう 魔法よ 私が皆さんに差し上げたいのも魔法なの
もしもそれが罪ならば
それがもしも罪であるのなら それならば私を... 訴えればよいでしょう!
明かりをつけないで

明かりの下ではみな醜く見えるでしょう
見るのなら蝋燭の灯りか もしくは月明かり
星明りではないかしら?
どれも十分明るいし
時には明るすぎるぐらいのもの 明かりをつけないで

(詩:フィリップ・リテル 訳:岸 純信)



**ARTIST
SUPPORT**

2025年度ご支援いただいた皆さま

2025年10月16日現在 敬称略

<年間サポート> 【個人サポーター】

朝妻 幸雄 M.I. 岩村 和央 K.U. 上村 憲裕 榎本 英二 Y.E. K.O. 大原 志津子 片山 由美子 K.K.
神田 尚子 北村 眞 小林 真希子 R.K. 相良 延利 新貝 康司 鈴木 忠明 M.T. R.T. 武田 健二
伊達 朱実 田中 治郎 東條 Lilly K.T. トゥルーラブ 真智子 苫米地 英人 K.N. E.N. 児子 弥生 S.N.
長谷川 智子 T.H. 樋口 美枝子 M.H. 平山 美由紀 藤野 盾臣 細沼 康子 M.H. 松尾 芳樹
真野 美千代 三木谷 晴子 安田 牧子 山川 和子 山崎 明日香 横谷 雅子(匿名希望 15名)

<年間サポート> 【法人サポーター】

三和プリンティング株式会社 株式会社 青林堂 三井住友カード株式会社 ロイヤルリゾート株式会社
株式会社ソーシャルキャピタルマネジメント きづきアセット株式会社
株式会社ロジックアンドエモーション ライフプラン株式会社



詳細はこちら